

## ななめヒマワリ

すなる

なつやすみがはじまるまえに、パパは、ぼくにシマシマのたねをくれた。

「ヒマワリのたねだよ」

パパはわらった。

「ヒマワリのはなは、ずっとおひさまのほうをむいているんだ。はながさいたら、よくみてごらん」

ママがしろいシーツをひろげるよこで、ぼくはたねをうえて、まいにちみずをあげた。

ときどき、とりがたねをたべようとしてやってきたけど、ぼくはがんばってたねをまもった。

パパは、いつもまどからにこにこわらって、それをみていた。

おひさまがキラキラまぶしくなったひ、ヒマワリは、やっとちいさなはっぱをだした。

「やったあ！」

ぼくは、ぴよんぴよんとびはねた。

それから、ヒマワリはどんどんおおきくなって、あつというまに、ぼくよりもせがたかくなつた。

ぼくはパパに、まいにちヒマワリのことをはなした。

このころ、パパのかおは、ちいさなまどからしかみられなくなった。

ヒマワリのでっぺんがもこもこふくらんで、きいろいツンツンがみえてきた。

『つぼみ』だって、ママがおしえてくれた。

「ママ、だっこして！」

ぼくはママにだっこしてもらって、まいにち『つぼみ』をみていた。

ヒマワリのはながさいたのは、なつやすみになってからだった。ぼくは、くびがいたくなるほどヒマワリのはなをみていて、

「あれえ？」

と、こえがでた。

「ママ、ヒマワリ、おひさまのほうむいてないよ」

そのつぎのひも、そのまたつぎのひも、ヒマワリはおひさまとぎゃくの、とおくのやまのでっぺんをみていた。あさおきたときも、ゆうごはんのまえも、ずっと、おなじところをみていた。

ぼくがママといっしょに、まいにちヒマワリをみていると、ママがぼくにそつといった。

「パパにあいにいこうか」

ママはヒマワリのむくほうをみつめて、あるきだした。ぼくは、ママのをぎゅつとにぎった。

父さんが死んだ日。僕はしぼんだヒマワリからたくさんの種を手に入れた。ヒマワリたちは今日も空を仰ぐ。